



**国際理解**・・・本校には60名以上の外国籍の生徒が在籍している。各学年で系統的な多文化共生教育を進めている。

取組の経過と内容

(1) 日本語教室での支援

① ねらい

- ・外国人生徒に対して、日本語の初期支援及びJ S Lカリキュラムの手法を活用し、教科指導型日本語学習の支援を行う。
- ・外国人生徒が自分の思いを出せる場として、教育相談を行い精神的なケアを行う。

② 活動経過と内容

- ・日本語力や学力に応じて、週に1～7時間の授業を取り出し、日本語の初期支援及び教科指導型日本語学習を行った。
- ・生徒の実態を考慮し、学び合いの利点を活かす小集団指導及び個別指導の2タイプを取り入れる等、時間割の工夫を行った。
- ・2年間日本語教育担当者ネットワーク会議で取り組んできたポイント教材(社会)の授業実践を行った。校内研修の取組として、1年社会(歴史)で公開授業を実施した。
- ・今年度日本語教育担当者ネットワーク会議小中合同グループで取り組んだキャリア教育に関して、職業体験学習の事前学習を公開授業として実施した。
- ・放課後学習や長期休暇中の補充学習の時間を設けた。
- ・高校進学に向け、面接や作文の指導を行った。
- ・学習時に、日記や会話の時間を取り入れ、生徒達の生活の様子や思い等を確認した。
- ・毎回の授業後に生徒の学習記録を作成し指導者間の情報の共有を図った。

③ 生徒の様子や感想

- ・不登校傾向の生徒や低学力の生徒が多く、取り出しが必要である生徒がかなり増えた。
- ・担当教員2名以外に、各学年から1名以上の教員が授業を担当することで、日本語教室運営の広がりが見られ、充実した支援となった。このことから、日本語力や学力が大きく伸びた生徒もいる。しかし、家庭の状況などから欠席・遅刻・早退が多く、今後の生活に展望が持てず、伸び悩んでいる生徒もいる。
- ・以前のような漢字や日本語学習中心の授業ではなく、生徒の実態を考慮し、個別及び複数生徒による学び合いのスタイルでの教科指導型日本語学習を続けることで、学習への関心意欲につながってきた。

(2) 在籍学級での支援

① ねらい

- ・外国人生徒が学習や生活に必要な日本語力を習得し、コミュニケーション能力を高め、学力が定着するよう支援する。
- ・外国人生徒をはじめ、周囲の生徒や教職員が互いの存在を「共に生き、学び合う存在」であることを再確認し、関係を深める。

② 活動経過と内容

- ・校内研修における研究授業やバンドスケール研修の実施によって、外国

人生徒への支援についての意識を学校全体として高めるようにした。

- ・初期支援の必要な生徒や日本語力・学力の低い生徒を対象に、日本語教育担当者及び外国人教育指導助手による在籍学級での支援を行った。

③ 生徒の様子や感想

- ・板書やワークシートのルビ、わかりやすい日本語での指導、視覚教材、小グループでの学び合い等の JSL カリキュラムの手法での授業を通し、学習内容の理解につながった。しかし、計算等の基礎基本や家庭学習の習慣がない生徒には、なかなか学力が定着しなかった。
- ・進学に向け、専門の教員による教科補充学習を希望する生徒もいたが、なかなかその時間を確保することができなかった。
- ・日本語教室と在籍学級（学級担任・教科担任）とのさらなる連携が必要である。

(3) 文化祭での取組と多文化共生学習

① ねらい

- ・「異文化に触れあう」「異文化に学ぶ」という機会をつくり、お互いの思いを知り合い、多文化共生の理解につなげる。

② 活動経過と内容

- ・文化祭での母国紹介や私の主張を行い、多文化理解につなげた。
- ・各学年で多文化共生学習に取り組んだ。
- ・海外技術協力員（ブラジル・モンゴル）を受け入れ、在籍学級で母国紹介をしていただいた。
- ・日本語教室前の掲示板に、対象生徒作成によるポスター等を掲示した。

③ 生徒の様子や感想

- ・文化祭における日本語での母国紹介や私の主張に対して、少し恥ずかしいと言いつつも意欲的に取り組むことができた。周りの生徒達も温かく受け入れ、頑張りに大きな拍手を送っていた。
- ・海外技術協力員による母国紹介の授業において、異文化に触れることで国際理解につながった。また、協力員と外国人生徒とのやり取りで、生徒の活躍が見られた。
- ・多文化共生学習ではポルトガル語やスペイン語を使った授業を体験することで、在籍する外国人生徒の思いを知り、お互いのつながりの一助となった。授業の中で活躍できた外国人生徒もいて、周りの生徒や教師の新たな発見と本人の満足感・自信につながった。

(4) 進路学習と小中高の連携・外部機関との連携

① ねらい

- ・外国人生徒に高校進学を意識させ、自分の将来について展望を持たせる。
- ・市教委が運営する「アクアレラ（定住外国人就学支援教室）」と連携し、不登校傾向にある外国人生徒への支援や、母語による学習支援を行う。外国人生徒が近隣の学校の外国人生徒と触れ合い、日本語や母語で話し合うことで気持ちの共有を図り、学校外でのつながりを作る。

② 活動経過と内容

- ・3年生だけでなく、1・2年生にも「鈴鹿市進路ガイダンス」や「多文

化共生交流会」への参加を呼びかけた。

- ・日本語教育担当者ネットワーク会議等を通し、小中学校の外国人生徒へのより良い支援について検討した。今年度は、小中合同グループにおいて、キャリア教育についての検討をし、公開授業も実施した。
- ・小学校の公開授業に参加し、また日本語教育担当者ネットワーク会議にて校区の小・中学校の現状と課題を出し合うことを通して、継続的な支援の検討を行った。
- ・進路学習における「ようこそ先輩」で、外国人の先輩の生の話を聞く機会を持った。

③ 生徒の様子や感想

- ・今年度の進路ガイダンスは、中間テスト直前ということもあり、3年生の生徒1名と2名の保護者のみの参加であった。ガイダンス後の各高校の質問会では、高校の先生や先輩の話を熱心に聞く生徒・保護者の姿が見られた。(昨年度参加者は生徒10名、保護者6名)
- ・今年度は、多文化共生交流会への参加者がいなかった(昨年度は1年生2名が参加)。外国人の高校生(本校卒業生含む)や他校の中学生と交流し、進路について考えたり、自分達の思いを出し合うことで、同じ立場で共感し合える関係を築くことができる良い機会なので、来年度は参加者が出るように呼びかけていきたい。
- ・アクアレラへの通級(週1～3日)は、3年生7名、2年生4名、1年生1名であった。母語による授業は彼らにとって安心できる環境であり、意欲が高まる場となり、進路保障の一助となっている。

(5) 保護者・地域との連携

① ねらい

- ・保護者・地域と学校が連携し、生徒の生活面や学習面の手助けをし、生徒の成長を支える。
- ・保護者への連絡を確実にすることで学校への理解を深め、安心感や信頼を獲得する。

② 活動経過と内容

- ・保護者会や修学旅行などに関する学校からの文書をポルトガル語(スペイン語)に翻訳して配布した。通知表には母語の副表を付け加えた。必要に応じて家庭訪問を行った。
- ・新入生説明会、入学式後の説明会、進路・修学旅行説明会を別室で通訳付きで実施した。

③ 保護者の様子

- ・安心して学校へいろいろな相談をし、学校教育に熱心にかかわろうとする姿も見られた。
- ・ポルトガル語(スペイン語)以外の外国語の翻訳・通訳対応が必要な保護者がいる。

**防災教育**・・・「自らの体験に基づいた防災マップを作る」－大学生とともに－

【 その1 】

生徒は、現在の避難所について把握するとともに、そこまで歩いてみて、避難に困難な場所等や気づいたことを地図に記入する。

【 その2 】

学生さんと生徒とともに、避難所まで歩きながら困難な場所等の説明を生徒から受ける。その際、学生さんは「生徒が気づかない実際の困難さ」に意見する。地域の方にアポを取りますので、その方にインタビューをし、意見をもらう。

【 その3 】

学校に戻り、それぞれのチームの新たな「気づき」を紹介し合う。そこで、さらに他のチームの避難所までの困難さについても意見を出し合う。地域の防災担当者をアドバイザーにお招きする。

【 その4 】

防災に関係する方に話を聞く。自分たちの考えにさらなる指摘をいただき、避難行動の際に中学生が災害ミニリーダーとして行動できるようなご示唆をいただく。

【 その5 】

伊勢湾台風の経験者をお招きし、その体験談を聞く。これまでの取組から、防災の始点で質問する。

【 その6 】

この取り組みを「紙芝居」にして、小学生にもわかりやすく伝えることを想定する。チームごとに発表する。

